



政
 印
 一
 雲
 野
 家
 斗

特 別
 ^5
 6590
 34



ハ5
6590
34

首途

多所々の希字もすてー十車
 己後の又至山ありと例の社牛
 例の首途を見送らるる小春
 月ありありと庭よゝゆゑに
 杖をすゑ野よゝ母啼の聲を
 雑りてさして入里と合の



錦色紋千里一差の鶴を臨

あうら

拵園

光り得て昇らるる月と空の岸

三固

葉のしるす麦湯も旅の如流

楓井

台文初と仕つけを猫の嗜にて

支撰

南とら向く静ふら 昼

其墨

手習ふとも四方へ教てあうら

竹人

着て見らるる唐人の 鬘

玉泉

白雨の富士もかくさき晴て行

化卜

軍士繪くくも管の一連

里川

酔やまよ客去りし多し残念ふ

未了

身清やしれ多のこまらとも

後三四

ぬる里の花香りく暖におひ

前可水

音も和らるる青麦のゆ

和友

右筵哥一折

各賀喜年 嘉文何り

法め山雪く磨きし杖待ん 文撰

見送るや雪くうさう筋了 玉泉

衡不とあ海を海め着途が 竹人

着途おとく足跡くや友十を 其墨

見送ミツリの道さくものく 小春室 化卜

何々ゆとも樹高水ふ 友子 里川

ゆー待て間まや泊衆の雪景冬 和友

頓てあふぬ水と咲て軒の標 和光

標とも古里おも泊衆の標 未了

冬もあさき長谷の流水を煙汲ん 可水

まやせいの月くまふ三周上人

道あうらぬの旧跡おも見四了

玉ふとみんとふゆの郷の石地帯の

川流を安んずるを今より

信

家土生よ忘れふ宇治の春の花雪

全

黙頭て唯こもりくの冬より

楓并

三國と文やらせき山と交りよして

こゝしこ島の舟途を後一倍

神や月まの丸あり

朝暮園

身よしし海へ心の月も狂

三四更

氷心とぬ道のおもひ

三國

世の中の変化は酒よりふるらん

松二

價し似せぬ馬め逸如

越山

え娘の奉ふもめく嘘見せ

且雪

此句を美 五月ぬの和歌

統々

文日枝も撫所ぬ 枝も暮かろ

一啼

鴻 立行々 曙もそらく

世三

口舌 沸かろ 毎日の ぬめり

蘭石

糸竹の 音も 通ふ心根

蚊居

打やま あらう 花の香を 酔

里批

あけく 命 何し おろす 甲あ

三巴

頑是ふぬ 敷を 削ら 茂てま

里正

次へも 獲ぬ ふうぬ 後 氏日

如翠

君冠 哥一頌

岩 餞 別の時

中へ 咲花 粧 舟 出 途 都

改

里正

雪 霜よ さら 来ん 笠を 仕 代衣

露石

興 沖人 書よ ころり 之の 泊 舟の 月

蘭石

其包の噴ふるやの空の松
 伯胤は積る雪を待つに枉多待ん
 清のけし月や首途のひまに晴
 其徳やそりやの山年一積る雪
 ふを清くそんで来留せ初胤の雪
 やうてやう人真如の月の清る程
 香を顔にしとめふん積胤の冬の松

故居
 玳弁
 三巴
 欽古
 清筆
 如翠
 松二

三固上人こむひんそりや三固の
 冬山ふらぬるさ其知ぬ如の冬
 旧跡をも見ぬり玉ふら一ふを具
 道くの血をそもひそりて
 やうてやう人佐野の後の雪のまふ
 辛卯の冬三固子る小初胤よ
 趣りしを錢別一倍りし

乞

ことしよて十ヶまは湯とわ

いふはの魚空あやめもこは

足如く鯉魚三十二鱗は湯れ

天上すりやまけ白魚後して

冬冬くらん小春の籠の小池坊 魚書三卷 四頁三

後て舟てぬる夏如の月待ん 上四村 一喃

ぬる曠ゆらん初流ぬ雪のひま 野田 其三

三因上人ことしとんせり冬

玉ふ小春月末の北よてぬ杖書 シラス

のそしぬのころとまへり例の奪も

その時糸帯をものしと着余の

一句を口まへ白

ぬるるめ時ぬるまへ 春序并 軒の松 越山

其二 宇田松隠社中

三回上人をみせしむる也

る余

照し来よ冬は終りくの忘の雪

美良堂

鶴仙

雪の道の秋さくらもや

三回

まよふも換ても馬の癖ありて

樂加

市のさうりの押におさるん

虎彦

こもつても雁の月の二日酔

南曉

格多るもしるむこそ不身

可橋

林大埃くちろもしふこの小長刀

拵雨

懐くのこし何代の鎌倉

百前

友の侍をふ木歌し和らけて

古瓢

台稀くもかゆぬとて美水

善山

障りの子四方つらき花口和

表花

諸をのそぬ春の神垣

莫二

右短歌一折

各賀章

物めちりすく人泊船の忘の雪	南境
やうて待人時ぬ雪の寂	折雨
ついで照すく人雪の旅の笠	俣産
雪ふりたてぬ水もやの冬は詠り	百軒
ぬる日をわかくて待人冬こもり	可橋

雪途しれ母し庭のゆり花	古瓢
雪ふり身のまゆ中雪途も春時	英二
雪途やぬり花咲小春月	表花

和詩

雪まの春しちふもやせ山と
 平等心も是菩提とも
 八雅の平常文く悟りて

千光精舎より其井上人を訪ひ

坐す多のし来馴し渾の小夜後

三国師を得て

みら見ても賢らぬ名や古き松

青柳庵

其井

俟りぬをれし枯水ぬまの葉

三国

君下畧

阿上の撰し心より入平ふ

阿代をうんあ

卒に後あらし つかぬもふ

阿州

八段八演よて

のまし 下り笠啼の声彼の音

年政浦をぬこ屋よ星を視けて

借は多る窓や糸浜を冬籠

久島

小春日や若くおふ急と急のま

鐘打坂一宿して

笠^{ヌイ}残^{ヌイ}て山見ぬ水夕暮ぬ水

三江寺

予々の名め三江寺や雪一解

徳島

くくめて小春園子居穴親ひて

月空く明る水邊を三時を今

三因

すよみの見ゆる旅の月空

蓼花

公の代々年所馬所も来流きて

打ぬくや一坊くる所田く

酒止めてのふ^{シラタ}全日は急^{シラタ}らぬ

左

因

全

めくく雄まきまき薫る稲の香 園
秋つあぬ老の岩まきうらやほ水 全
まきのふい近衛殿ぐまきまき 花
みらくくまき花の教の弘師りて 全
長き園まきまき後ぬまきまき 園

古短歌行

探題

お鶴の戸まきまきの 霜夜の柳 三園
今年まき氷の山まきまき 魚 小春園

園山寄

吐蟬まきまきふまき行まきまきのまきまき
淡海島

うまきまき日まき降まきまきまき淡海島

紀丹

由良を後国守の侍

由良ありて候をいふ久良の

彼も小春の気多しとあり

おへしひしめ子多ありあり

加美田も弓^カ遠子^カ後^カ了田良の^カ

若

西来るは

泉州

信田り森

衣小さや葛の長糸の冬拵を

高石り霞

波の音も多めし霞やしぬ

雑波屋の松

梅の外のを拵あきて岩の囀

徳州

任の江より

松よ 琴ヶ浪より つまや神楽月

ふよあし 遠るて

波山の月を休めよ 矩筵に

四天王寺

河内

後藤 基次と云 巖崎 三友月の

鎗 合とて 六友と名付し 四誦し

いよありて

花の老く 残るし 山之 六の花

和州

高奴の成

そんせ猪狒イナの窟くわの口を返して

学として照すう忘る積り写

母見よの按

その謀め千々の若く探るや

程子くそんや色立佐野の傍り

よんちうして

駒とめく若くもかくや佐野の雪

三吟

谷まうふくゆで素麺や若の朝

五原寺

代いの名に枯水ぬ一むらふきり

あら

こい風雲致多よして言結

何多... 二色はて

題と可

冬木立牛や其名も八重さくら
雪の云をなれ月め三笠山
一陽の春こや梅も浅香 止

和詩

夕... 都の昔... 傳へて

今も... 流氷と... せせ
糸女の宮の衣氷残氷
藤原... ふう... 猿沢の池

右

こ... 多... 途...
... 中... の徒然を
... して

中庭より文より果ては短燈の吐く
酒よさへ花の河に酌む友

三因
鬼産

今春若のこゝ佐野の渡りの
建連祿底のつらぬ家もろく
初も長安の白髪又美やむ
誰か心と友多あひとる月の 奥
秋コキの鈴生ツキ秋コキの玉むし
善くも利生るる弓矢神

○城州
若短歌行

宇治

橋ころい時とそあの花後めり
ゆきみ

洛陽

こゝろめて囀吹子を節にて

三回

此の世にこそ教を授へん雪の意

空候に月も才も夜吐し

囀吹

唐大和子も信り代りありて

鬼産

文鳥は休たし多しぬほきか

回

親人の世も色候ぬ片候り

全

赤髪と水は見かゝり白

産

吸おし青袖のせは意を水て

全

夕候てり可く候るの暗際

回

繪ぬ紙は筆の双紙も置文へ

全

待り甲斐文字も殿恨めしき

産

祈りそいの通ふ地土の花

回

河をぬぼるをいふ耕

筆

古題一首

月一初をいふて

鬼産

漸探く河をいふて嬉しく枝の庵

支せじとん多も世啼

嘯吹

右

河

七日ふらぬ後めく安く二つの花

情ふ寺をいふて

置る初めをいふて東く山

後月橋

閑ふらぬやいふて雪の後月橋

糸都をいふて伏見より舟子來

後くいふて

あつらひす氷うり淀の車は

ふにまわくう一口津くつを

暖やし玉名香多のしや寒の按

木津川口より舟

友より水の芦くき羽行ふ多し

麻多耶山途并

雪のふ云仰り流りく麻多耶の岸

兵と年

此浦より舟行りおかしな海と

一百里よりうを起せり

往復

舟より心も決て往らふ

侍情

待得もろ 牡もや千里の月と雪

炬燵に せしむる 終夜

吹風の技もあらまぬ 君の代よ

み三ッお

田庵

つらみき、軒端より 芳張折れ

蘭石

三因

筆

